九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

バルザックの農民像について

西岡, 範明

https://doi.org/10.15017/2332678

出版情報：文學研究. 78, pp.23-45, 1981-02-28. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

バルザックの農民像について

西岡範明

バルザック（Honoré de Balzac, 1799〜1850）はついに農民を描かなかった、というより描けなかったという感慨は、『人間喜劇』（La Comédie humaine）全篇を読了したとき、共通してわれわれの中に残る。このことは農民に限らず、例えば当時新興の工場労働者などについても同じなのであるが、もちろんバルザックその人が創成した小説観あるいはそこから発したレアリスム、自然主義を階梯としつつ形式化された今日的視点に立って見てのことである。したがって、ここで「描けなかった」ということは、新批評（Nouvelle critique）、特にロブ・グリエ（Robbe-Grillet）などが採る不可知論的な意味においてではないことを付言しておく必要がある。このように座標を定めて見た場合、農民に比べれば、セザール・ビロトー、カルドー、クルヴェルなどを代表とするパリの商業ブルジョワが完璧な筆致によって描かれていることが肯定できるし、デルヴィル、クロッタ、ゴデッシャール、あるいはグランヴィルなどは法曹界の人間の典型として完全に近いと断言できるであろう。[1] また、これらの作中人物を共時的に見ず、時代という函数を加乗した相の下で、その意識なり行動形式なりを考察しても、やはり同じことが言えるであろう。商業ブルジョワを例にとってみると、例えばナポレオン統治時代初期のそれはラゴン、[2] 第一帝政時代から復古

王政時代のそれはビロトーが、ルイ・フィリップ時代のそれはクルヴェルが、それぞれの特質に色づけられながら、一貫した商人根性を流露していることは、ブリュンチエールの感取したとおりである。[3] 都市貴族にしてもショーリュー、グランリュー両公爵の如きは旧王朝貴人の化石的存在、フォンテーヌ伯爵らはブルジョワ化した斜陽貴族、ド・マルセーさらにラ・パルフェリーヌなどは腐敗堕落のゆえにかえって雑草の如く強靱になった、むしろ兇暴化したともいえる虚無派新型貴族を、それぞれがみごとに具現しているのが認められる。[4] すなわちこれらの人物に接するとき、読者がおのずと彼らのなかにメタモルフォーズできる条件が備わっているということである。ギリシャ悲劇がその最小限のところを仮面の使用によって示した外形の象徴性と、サルトルがカミュの『異邦人』にさえ認め得るとした心理のてんめんたる脈絡と、である。[5]

バルザックの農民の場合、こうした条件が欠けているというのではない。ただ貴族、ブルジョワあるいはプチ・ブルジョワなどに比してその不徹底が感じられるのである。マルク・ブランシャールはその大著『バルザックの作品における田園とその住民』において、精緻な史的考証をこころみたすえ、その由って来るところをよく剔抉している。彼は、バルザックが農民の住居、服装、損得勘定、情熱のもたらすところについて記述するときは、その知識の貧しさを部分的には隠しえているが、風景の描写、百姓言葉の復原、魂の感情的領域の解釈では弱い、とする。[6] 住居から風景までを含めて、農民生活の外的な面にかかわる部分は、彼自身の風俗理論にもかかわらず、地域的、時代的特徴の相互混淆が少々ながら見られるところに、こうした指摘が生じるのだが、それはバルザックが、着想から取材へという彼以後のレアリスムの常套と違って、日ごろ蓄積された見聞の記憶によって書くことが多かったからであり、やむを得ぬ事態であるといえる。またブランシャールのように深く詮索せぬかぎり、おおむね一般的常識に叶っていて、それによって構築される読者の農民像にいちじるしい瑕瑾や歪みを与えるほどのものではない。[7] 問題はむしろ「魂の感情的領域の解釈が弱い」という点にある。

いったいにバルザックの小説の人物たちはそれぞれがある欲望につき動かされ、目的への情熱の激しい波動を内包しているが、その心理に当然あるはずと思われる紆余曲折を見せてくれない。『人間喜劇』中最も繊細で複雑な、最も情緒的な人物といえるリュシアン・ド・リュバンプレ（Lucien de Rubempré）にしても、その友人たちへの裏切りの場面において、あるいは情婦を人身御供にするとき、[8]『赤と黒』のジュリアン・ソレル（Julien Sorel）がレナール夫人（Madame Rénal）の手を握るとか、マチルド（Mathilde de la Mole）の部屋に忍び入るとかの簡単な行為を決心する際にスタンダールが描いてみせるほども、内心の葛藤は描かれていないのである。しかしその情熱が極度に昂進するとき、また絶望におちいるときは、あり余るほどのイマージュを人物自身の脳裏においても、単なる手法的譬喩としてであっても、想像力の許容量いっぱいに使用して心理の描写に没頭してはいる。[9]農民の場合、それさえ明らかに不足しているのである。『田舎医者』のブナシス（Benassis）の言うとおり「農民は不断の労働のため感情に身を委ねる余裕がない」ため叙述しようがないといえばそれまでであるが、同時にブナシスは農民が「時として烈しく感情をはたらかせることができる」と付け加えている。[10]もちろんブナシス即バルザックと考えてよいのである。『農民』のトンサール（Tonsard）一味が監視人ミショー（Michaud）の殺害を決意するとき、『田舎医者』のクレチン病部落の住人たちが移住に同意しようとするとき、あるいはまた『村の司祭』（Le Curé de Village）のタシュロン（Tascheron）が父祖の地を捨てて愛人と国外逃亡を企て、その資金稼ぎに強盗殺人を犯す途中は、彼ら農民なりの感情的ヴォルテージは最高に達しているはずである。しかもその描写は皆無にひとしい。[11]さらに、これこそ農民生活の芯となるはずであるが、彼らがその第一の仕事であり生活そのものの意味である農耕に費やす労苦、それに傾ける情熱、悲喜の感情が閑却されている。その原因はどこにあるのか、つまりバルザックにとって、農民という種族は理解不可能な存在だったのか、それとも文化的に考究するだけの価値がなかったのか、あるいはまた別の理由があったのかについて推考してみたい。

注

※表中 C. H. とあるは Bibliothèque de la Pléiade 版 Honoré de Balzac:La Comédie humaine の略記号である。

(1) 以上の人物が登場する主要な作品はつぎのとおり。
César Birotteau=*César Birotteau*, Cardot=*La Maison du Chat-qui-pelote*, Crevel=*La Cousine Bette*, Derville=*Le Colonel Chabert*, Crottat=*César Birotteau*, Godeschal=*Les Petits Bourgeois*, Granville=*Splendeurs et Misères des Courtisanes*.

(2) 〃
Ragou=*César Birotteau*

(3) F. Brunetière : *Honoré de Balzac*, p.110.

(4) 以上の人物が登場する主要な作品。le duc de Grandlieu=*Splendeurs et…* le duc de Chaulieu=*Splendeurs et…* le comte de Fontaine=*Le Bal de Sceaux*. le comte de Marsay=*La Fille aux Yeux d'Or*. le comte de Palférine=*Un Prince de la Bohème*.

(5) J. P. Sartre: *Situations* I (Gallimard), pp.99—121参照。

(6) Marc Blanchard : *La Campagne et ses habitants dans l'œuvre de Honoré de Balzac*, 1931, p.469. この点については打算と種々さまざまな真実とがいりまじったものが附随していて、そのために作者の作品のなかに取りいれようと努める詩味が一見したところ排除される」と。(Les Deux Amis, [1830 ?]), Ed.Conard, XXXIX, p.246.

(7) 『農民』(Les Paysans) において、バルザックは胸甲騎兵など既に存在しなかった時代に胸甲騎兵を登場させたことについて、読者の批難に弁明しているが、同じ趣旨である。

(8) *Illusions Perdues*, C. H., Ⅳ, pp.858—860.やよび *Splendeurs et Misères des Courtisanes*, C. H., Ⅴ, pp.790—791参照。
Stendhal: *Le Rouge et le Noir* (Ed. Garnier) , pp. 84—87, 332—338参照。

(9) 例えば、リュシアンが牢獄で自殺する場面 (*Splendeurs*……C.H., Ⅴ. pp. 791—794) アタナーズ・グランソン (Athanase Granson) の入水自殺の場面 (*La Vieille Fille*, C.M., Ⅵ, pp.915—917)

(10) *Le Médecin de Campagne*, C.M., Ⅷ, p.347.

(11) もっとも、これらの事件は謎めいた状況設定が推理小説的な興趣を与える。『暗黒事件』(Une ténébreuse Affaire) は犯罪の経緯が謎につつまれているが、『十三人組物語』(Histoire des Treize) を除き、この種の事件がほとんど地方の町村において起きていることは、地方の治政状況、民度をうかがわせるのである。

『人間喜劇』序文においてバルザックは、当代社会の重要な構成分子をおおむね職業によって分類し、たぶん思いつくままにであろうが、兵士 (soldat)、労働者 (ouvrier)、官吏、弁護士、有閑人 (oisif)、学者、政治家、商人、漁師 (marin)、詩人、貧者、僧侶[12]を挙げている。不思議に農民 (paysan) がないのである。ただ「弁護士」をもって法曹界のすべてが含まれているとみるのが自然であるように、「労働者」「貧者」の中に農民を含めてみるべきであろう。この序文を草するときのバルザックの脳裏に、広大なフランスのいたるところに散在する農村と、そこに牛馬の如くはたらく二千六百万余の農民のさまざまな像が刻みつけられていたはずなのである。[13]なぜなら、『人間喜劇』所収の小説作品中の第一作、一八二九年刊の『ふくろう党 (Les Chouans)』はいわば農民一揆のたぐいであり、しかもこの作品の中の田園は、それまでの冒険・怪奇小説の道具の域を脱して、すでにレアルな風俗描写の対象となっていること、ついで『あら皮(La Peau de Chagrin)』(1833)、さらに『農民 (Les Paysans)』第一部 (1835)、『村の司祭 (Le Curé de Village)』(1839) と連なる重要な作品群において、農民たちの占める役割と位置が大きいことを見ても、この時期、彼らへのバルザックの関心のほどが窺えるし、それは簡単に忘却されるものではないからである。また一八三二年のものと推定される『十九世紀風俗研究』の構想に関する彼自身の覚書に『私生活場景』『社交生活場景』『サロン場景』などと並べて『村の場景』という項目を掲げているのも、如上のことを裏付けているであろう。[14]しかし、それだけにあの序文に農民という名称が、貧富の差こそあれ、同じく農耕に全生活をかける者として独立させられていないのは注目に価する。戸籍簿とはり合う意気込みをもっての創造人物の量産

と、生物学的発想から必然的に生じる地方色乃至特性重視の構成法を考えるならば、『人間喜劇』の世界における農民がその最重要の地位を占め、他のどの職業人にもまして多数かつ多彩に造型されていて当然といえる。実際はそのようにならなかったことをこの序文は教えてくれるのである。これらは『田舎医者』『農民』『村の司祭』と、田園小説の連続的出現という外面的事象が示すものとは裏腹に、農民そのものについては、いわば作者の評価が消極的であることを示している。

読者の不評を買って新聞掲載を打ち切られたとはいえ、『農民』はその後ついに完成されなかったし、また一八四五年に作成された執筆予定作品表の中では、ひき続き農民を描くはずの『田園生活場景』に属する予定作品は、わずかに二篇を数えるのみで、しかもそれは実現されていない。結局この『場景』に収まる作品は前掲の『田舎医者』などの三篇だけということになるのだが、同じ『人間喜劇』中の最も数少い部門の一つである『軍隊生活場景』は、完成作品こそ二篇に過ぎないものの、予定作品は実に二十一篇にのぼるのである。[15] したがって『田園生活場景』は『軍隊生活場景』とはかなり事情が異なり、後者のように見聞、経験の不足という、一時期的な理由によるものでないことは明らかである。農民の描写は多作を要せず、しかもこれまでの作品でほぼ充分とみていたと解釈し得る。[16] つまり農民層はその分布の広汎さ、生活様式のいちじるしい相違にもかかわらず、その人口に比例しうるほど多くの典型を生み出せるほど個性化が進んでいないと考えられたのであろう。また彼らを総体的にみても社会全体のドラマに果たす農民の役割は小さいと思われたのであろう。これらのことは、人間の精神の多様さと豊かさは文化度の高さに比例するというバルザックの社会的自然論、すなわち人間社会もまた一つの自然であり、自然と同じ進化の仕方をするという考えに由るものといえる。「動物の間にはほとんどドラマはない…（中略）…彼らは追いかけっこをするだけだ」という彼の言葉を想起してみよう。[17]『ふくろう党』で蠢動する「山羊の皮をかづくブルターニュの農民」は粗野単純な共和軍士官たちにさえ「知能が一かけらもない、谷あいの牧場で草をたべる動物、アメリカの未開人、喜望峰の土

人」ぐらいにしか見られていない。[18] 彼らが野良仕事をしているさまは、ラ・ブリュイエールが描いた、あの土にへばりついたような十七世紀の百姓と変わるところがない。[19] パリから発する文明の光が届かぬ暗冥の天地を動きまわる野獣に二世紀の時の流れは無きにひとしいかのようである。彼らが『人間喜劇』の舞台に登場できるのは都会人すなわち文明人との避けがたい接触が起こす事件によってのみである。しかも、ほとんどが一つの下級集団として他の上級集団またはそれを代表する個人と交渉をもつ形において。例えば『農民』ではパリ製の社会規範をひっさげて村に乗りこむ文明開化集団に反撃する本能的、排他的集団として、『ゴーディサール（L' Illustre Gaudissart）』（1833）においては、近代的商業方式を自慢するパリ商人（出張販売人）に対して土地の伝統的かけひきで戦う固陋で狡猾な土着人集団として、そうした性格に加えて『田舎医者』や『村の司祭』などにおいては、すぐれた知識人たちが導入する医学、機械工学といった近代科学あるいは知的信仰の恩恵に浴する無知文盲あるいは信仰以前の後進集団のイメージを帯びて登場するのである。まさに光と闇の相剋といえるであろう。

このような農民のとらえ方は画一的、類型的に過ぎるうらみはあり、当然詩興の涸渇をもたらすものではある。その小説化に早々と限界が来て不思議ではない。

しかし、このバルザックのとらえ方が甚しく間違っていたとはいえないだろう。彼の描く農民たちは一八四〇年代より以前の農民であり、未だ鉄道の急速な伸展を見ず、わずかにパリとリヨンの周辺を除けば、交通手段は十七世紀以来依然として馬車あるいは徒歩のみであって、農村の近代化にはまだまだ程遠かったのである。鋤、鍬、鎌、堆肥、焼灰などによる原始的な農耕法と、その結果たる酷烈な労働、極端な低収入がある。[20] 余分の感情生活が入る余地がないし、知的欲求の生じる余地もなかろうとは当然考えられる。現に、革命以来、町村自治体に一任され、その成果が期待された学校教育も、それら自治体の貧困と当事者の無知、我欲により、大多数の町村に小学校すら無かった。[21] バルザックにとって社会を進化発展させるのは「情熱」であるのだが、「金持には情熱（des passions）があるが、百姓

には欲求（des besoins）しかない」。彼らにはかくて高度な倫理観もなく「神」さえ彼らの悪業を止める力はないのである。[22] どこまでも続く貧困と無知の悪循環である。もちろんこれらの生活条件に地域差はある。例えばトゥレーヌ（La Touraine）はブルターニュ（La Bretagne）ブルゴーニュ（La Bourgogne）に比べれば遙かに豊饒であり、文化度も高かった。その意味で『谷間の百合』『ゴーディサール』の如き抒情と諧謔に富む地方小説がトゥレーヌを舞台とし、『農民』『ふくろう党』のような陰惨、惨酷なドラマがブルゴーニュ、ブルターニュに、素朴清澄な『田舎医者』の叙事詩がドーフィネ（Le Dauphiné）に展開するのは自然だと思われる。しかし、バルザックにとって終生の桃源境であったこの豊沃なトゥレーヌさえ、こと農民の性格、生態となると特別な目でみられるのである。美しく豊満な大地、自然が必らずしも美しく豊かな農民の心を生むものではない。むしろ、この二つは絶対に共存することはできないかのようである。『谷間の百合』が花の色香の交響楽であるとして、その中にところどころ混ってくる不協和音あるいは雑音こそ、それをよく暗示している。佳人の紅唇から洩れる田園生活の苦労話がその一つである。「わたくしたちの田畑は折半小作にしておりますが、この方式ではちっとも目が放せません。こちらのほうの小麦も家畜もどんな作物も、みんな自分の手で売らなくてはなりませんの。それもわたくしたちの当の折半小作人たちが張り合う相手なんですが、あの人たちは酒場で買い手と馴れ合って、自分たちがまず売ったあとで相場をつくるんです。（中略）わたくしがいくら精魂つくしても、小作人たち（les colons）がわたくしたちのところの堆肥で自分たちの畑を肥やさないよう見張るわけにゆきません。それにこの人たちが折半小作人たちと収穫の分配のとき馴れ合ったりしないかどうか見にゆくわけにはゆきませんし……」[23] 宮廷貴族の嗜みを充分に身につけた女性だからこそこの程度の批判ですむのだが、『農民』に登場する旧軍人で成上り地主のモンコルネ（Montcornet）が発する怒りの叫びと内容は同じなのである。このトゥレーヌの百姓どもの陰謀あるいは悪口などは「せっかくの田舎の草花や清らかな空気の甲斐もなく、胸のわるくなるような酒やさかなの発散する強い臭気のこもった居酒屋兼用の百姓家」[24]で見られるブルゴー

ニュの百姓たちのそれと大同小異であろう。いずこも同じように、堆肥の盗みどころか、不法な落穂拾い、私有林、公有林の盗伐があったはずである。放っておけば地主は収益の四分の一を周囲の農民たちにくわれる勘定になるというのも必らずしも誇張ではないかもしれぬ。『田舎医者』には、これに加えて密猟までがある。『村の司祭』のリムーザン地方（Le Limousin）では野盗化した農民さえ加わる。[25] 無知、粗野、狡猾の悪しき面だけが強調されている感もあるが、これに追討ちをかけるかの如く、かのトゥレーヌでも「なにかにつけて嫉妬することばかりに頭を使い」「羨望が生活に活気をそえる」との批判さえ出てくる。これは貧農に限らず、地主、小貴族も含めた地方人の感情生活のすべてみたいにみられているのである。[26] かくてだれにも平等なはずの恋愛も彼らにあっては情欲に終始し、野心は物欲にとどまるか、精々目前の栄誉を狙うだけである。情熱のドラマなど有り得ないわけだ。スタンダールの徹底した田舎蔑視もここから生じるのであるが、バルザックはスタンダールほどではなくても、やはり同じ観点からの抜き難い侮蔑あるいは偏見がつきまとっているといえる。ブロセット神父（l'abbé Brossette）の言を借りれば「このフランスの野蛮人ども（Les Sauvages de France）」[27] は、その悪の面においても情熱、思考、意志の劇的な発現を果たし得る存在ではなく、その凝固した内面は作家が侵入する余地もその値うちもないことになろう。アランは『谷間の百合』のモルソーフ伯（le comte de Mortsauf）という人物を評して「この作品の人物たちの中で暗冥なものといえば、あの変人のモルソーフしか見当らぬが、これにしてもおよそ内面的なものとは縁遠い存在なのだ」と言っている。[28] モルソーフは、彼の夫人の言によれば、もう十年の農業生活で田夫野人となった男である。賭けトランプで僅かな金を相手にとられた時、妻が経営や子育てなどほとんどすべてにわたって自分よりすぐれていることを見せつけられた時の吝嗇と嫉妬による兇暴な振舞など、まさしく農民そのものとしてのとらえ方を示している。[29] しかし逆説的にいえば、この農民としては複雑で屈折した心理の持主さえ、内面的に描写しようとしないところに、バルザックの偏頗な農民観が最もよく現われているのではなかろうか。

また以上のことから彼ら農民にはバルザックの小説の動力ともいうべき時間的流れが無い。再びアランの言葉を引用するなら、凄惨なゲリラ戦がくり返されたのち、ついに鎮静したブルターニュは、百人以上もの敵を殺したマルシュ・ア・テール（Marche-à-Terre）の老いたる姿を通して描かれるが、「（反乱の）結果たるやゼロである。ただ最後において、フジェールの市場から牛を牽いてもどってくる得体の知れぬ百姓（Paysan impénétrable）まるだしの男をひとり見掛けるばかりといっただけである。（中略）だがこのマルシュ・ア・テールは、いま何を考えているのだろうか。おのれの牛のことをである。[30]」しかし、アランはそれをなかばしか信じないと言う。血にまみれたこの最後の「ふくろう」党員は、もはや戦前の彼と同じではないと思う。バルザックはその辺をとき明かしてくれぬ。しかし戦乱はなかったものの如く、すべては元どおりといった筆致である。残るものは農民たちの兇暴な力への畏怖である（少くとも農民たちに関する限り）。

（12） *Avant-propos*, C.H., I, p.4.

（13） M. Blanchard: *ibid*, p.306. 農民人口について、バルザックは『農民』の献辞に「頭は一つ、腕は二千万本のこのロベスピエール」と言っている。彼は世帯主だけを挙げたのであろうか。*Cf.* C. H, VIII, p.11.

（14） *Cf.* B. Guyon: *La Création littéraire chez Balzac.*（Ed. A. Colin）, p.15.

（15） C. M., I, pp. X—XI.

（16） ブリュンチエールは、農民全体の数からいってこの三篇のみでは充分な描写は出来ていないと言う。客観的にみてそれが正しいであろう。Brunetière: *ibid*, p.283

（17） C. M., I, p.5

（18） *Les Chouans*, C. H., VII, p.776.

（19） La Bruyère: *Œuvres complètes*（Bibliothèque de la Pléiade）, p.16.

（20） ブランシャールによれば、当時の農民所得は一人平均五〇〇フラン程度であった。（*Cf. ibid*, p.292.）バルザックが親から捨扶持をもらい、文筆修業をしたレスディギエール時代、その最低の生活で月一〇〇フランを必要としたことを考え合わせ

ると、農民の収入の低さがわかる。

(21) M.Blanchard: *ibid.*, p.294.

(22) *Les Paysans*, p.28. p.61. 『ふくろう党』ではこれと逆に狂信的熱狂があるが、それとて掠奪をも許されるという功利打算に裏付けられているのである。

(23) *Le Lys dans la Vallée*, C. H., Ⅷ, pp.832—833.

(24) *Les Paysans*, C. H., Ⅷ, p.45. *ibid.*, *passim*.

(25) *Le Curé de Village*, C. H., Ⅷ, p. 581. この現象はジョルジュ・サンドもよく知っていた。 (*Cf.* G.Sand: *François le Champi* (Ed. Calmann-Lévy) ,*notice*, P. 3, etc.)

(26) *Le Lys*.....C.H., Ⅷ, p. 808. Stendhal: *Appendice sur Le Rouge et le Noir* (Ed. Garnier) にも同じような説が述べられる。ただ、スタンダールの場合、人口二万以下の地方町村の住民についてである。農民は彼にとって問題にもならない。

(27) *Les Paysans*. *ibid.*, p.73.

(28) Alain: *Avec Balzac*, Les Arts et Les Dieux (Biblio. de la Pléiade) , p.943.

(29) *Le Lys*, *ibid.*, pp.823. pp. 872—874, *passim*.

(30) Alain: *ibid*, p.1000.

前述のように、農民たちを未開の自然状態の集団として捉える描法、そしていま挙げた『ふくろう党』あるいは『農民』などでみられるこの激烈な自然的破壊力に対する不安と恐怖、そしてまた劣等視、すべてこれらはバルザックがつねに農民の外にいたこと、農民との接触さえも充分になされなかったことを啓示している。ブランシャールも指摘するように、たしかに『ふくろう党』のための取材にあたっては農民の家を訪ね、古老の話を聞き、大いに談笑したことはわかっている。その他にも同様な機会はあったはずである。[31] しかし、またテーヌの批評の如く「彼はその行状、精神、性向という点でパリ人であった」のであり、[32] 農民の側に立つことはなかった。サッシェ (Saché) 、フラペール (Frapesle) 、サン＝シールのラ・グルナディエール (Saint-Cyr-sur-Loire, La Grenadière) などでの滞在も、結局はパリ人、あるいはパリの作家としてのそれであり、別荘暮らし、または地元の地主の賓客の形でであった

に過ぎない。農民との、長期間はおろか短期間の共同生活などいっさい無いのである。このことは、田園を舞台とした彼の小説のすべてが、『田園生活場景』の三作も含めて、そのテーマをになう人物が、いわゆる他国者で、特にパリまたはその他の大都会から来た知識人、文人、芸術家、あるいは土地を買いとった新地主であって、彼らが農民とその周囲の人間たちと衝突するところから筋が発展してゆくことと符合する。[33] それらはおおむね両者の相剋によってはじまるのだが、農民が彼らのもたらす恩恵に浴する素朴なる受容者、つまり一種の牧羊の如きものになるのでなければ、優者敗退の結末が待っていること、前述のとおりである。『農民』、『ラ・ラブィューズ(La Rabouilleuse)』がこの都会人敗退のよい例である。しかもそれらの結末に至るまでの、あるいは結末の作者の筆致に苦々しい気分の漂っていることをわれわれは感じとる。[34] バルザックにもし農民との共生の体験が充分にあれば、こうした定式化された作法は生じなかったであろう。アルフレッド・ド・ヴィニーは同じ誤謬によって淳朴な農民像を空想したし、ジョルジュ・サンドもこれとやや似ている。[35] このことは十八世紀末から十九世紀前半にかけてのフランスの社会的激変がもたらした各階層の交流といった現象と、地方色を尊重するロマンチシスムが刺戟した同世代の作家たちの皮相な観察結果にほかなるまい。バルザックはたしかにパリ人であった。だからあの一八三〇年の革命に恐るべき威力を発揮した労働者、職人たちについては、すでに『長子権論(Du Droit d' Aînesse,1824)』や『イエズス会史(Histoire des Jésuites, 1824)』の著述以来、保守派への迎合を見せはじめていた新進作家バルザック、『結婚の生理学(La Physiologie du Mariage, 1829)』で上流夫人たち好みをみせた流行児バルザックの心胆を寒からしめたものの、そのことは彼が彼らへの共感を吐露することを妨げはしなかったのである。[36] つまりは、彼の生活体験の問題であって、パリである限り、彼には下層から上層へ、あらゆる場における体験を持っていたからである。彼はパリで学生時代を送り、法律事務所の書記から印刷工場の経営者兼植字工まで、都会の職業ならばほとんどその労苦を経験した。しかしついに農耕生活に入ることはなかった。彼の夢であった田園生活も、一介の農夫になることではむろんなく、

また修道的な晴耕雨読の日々でもなく、別荘暮らしか、せいぜい農園経営者としての生活というところであった。[37] そして「仕合わせな家庭内と良き隣人たち」。[38] それももっともであった。彼の田園への思慕は、都会＝酷烈な創作生活、の労苦に起因するものだからである。ともあれこうしたバルザックの意識の程度あるいは限界は、彼をして話にもならぬとされていた農民の人間像を小説に仕立てることを妨げはしなかった。彼以上に農民を理解し、田園小説の開祖とまでいわれたサンドさえ、このバルザックの勇気と識見によって眼を開かれたのであって、彼女の農民小説はすべてバルザックがそれを書き終えたときから始まったのである。テーヌは次のように書いている、「最下層に職人と地方人（les gens de métier et de province）がある。彼らはかってはグロテスクなものでしかなく、読者を笑わせるために誇張して描かれるか、あるいは場面の片隅にいい加減に素描されているかであった。バルザックは彼らをまじめに描写した。」と。その「地方人」に小さな町村のいっさいの住民が含まれているのは明らかであり、農民もむろんその数に入る。[39] サンドが「一八四〇年においてなお真の田園小説らしいものがなかったこと、自分がその創始者であること」を書き記すとき、それはただ彼女流の、感傷的な時人好みの田園小説であったのだというべきであろう。[40]

(31) M. Blanchard: *ibid.*, p.52.

(32) H. Taine: *Balzac*, Nouveaux essais de critique et d'histoire (Ed. Hachette), p.294.

(33) 『田園生活場景』以外に『ふくろう党』『ラ・ラブイューズ』（La Rabouilleuse）『ゴーディサール』（L' Illustre Gaudissart）などがある。

(34) 『ラ・ラブイューズ』はその著しい例であろう。純粋無欲で優しい天才画家の主人公が、傷害事件の犯人に仕立てあげられそうになるところ、町民の悪意にみちた罵倒、投石を受けるところは、作家のパリ人としての憤怒がつたわってくるくらいである。

(35) Alfred de Vigny: Lettre à Busoni, le 11, août, 1848.

(36) *Facino Cane*, C. H., VI, pp.66—67 当時（一八三〇年ごろ）の彼の労働者観は、例えば『優雅生活論』（Traité de la

Vie élégante) によく表われている。「労働により組織化された人々はちようど蒸気機関のようなもので、みな同じ形にうみ出され、個性的なものがない。人間道具はいわば社会的ゼロであり、なんらかの数字がその前についていなければ、ゼロをいくつ集めても決して数にはならないのである。」この論はすぐさま前掲の農民論と対をなすことが感得される。(Ed. Conard.) *Œuvres complètes*., XXXIX, p. 153.

(37) *Lettres à Mme Hanska* (Ed. du Delta), II, p.433参照。

(38) *Correspondance* (Ed.Garnier) I, p.732参照。

(39) H. Taine: *ibid*., p. 50.

(40) G. Sand: Notice de *La Mare au Diable* (Ed. Calmann-Lévy), pp. 1—3.

さてこの時代のフランス文人の農民無視あるいは蔑視の風潮は、奇妙に明治後半の時代における日本のそれと似ている。例えば明治四十三年に長塚節の『土』に寄せた夏目漱石の序文を見よう。「『土』の中に出て来る人物は最も貧しい百姓である。教育もなければ品格もなければ、ただ土の上に生み付けられて、土とともに生長した蛆同様に哀れな百姓の生活である。(中略)彼ら(小作人たち)の獣類に近き、恐るべき困憊をきわめた生活状態…(中略)彼らの下卑で、浅薄で、迷信が強くて、無邪気で、狡猾で、無欲で、強欲で、ほとんど余ら(今の文壇の作家をことごとく含む)の想像にさえ上りがたい所をありありと目に映るように描写したのが『土』である」[41]。そしてまたこの作品がバルザックの『農民』と同じ理由で一部読者の不評を買ったのも事実である。田山花袋は『田舎教師』(明治四十二年)によって彼自身が田舎者と評され、またその主人公にしてからが田舎人を軽蔑している[42]。島崎藤村の『破戒』(明治三十九年)や国木田独歩の『武蔵野』(明治二十九—三十三年)にさえ、それを窺うことができる[43]。バルザックの農民もこれら日本の作家の描く農民も、同じ革命によって、たとい零細な百姓であっても、人間としての再生を得たはずであるが、革命後三十年を経てなおこのような眼で見られることが多かったのである。ともあれレアルな田園小説の最初のものが、東西ともに酷似した内容となるところは、興味深いことである。しかし『土』の勘次が永遠

の農民像でもなく、当時のすべての農民像でもないと同様、バルザックの描く農民像が完全に正しいものではなく、特にその将来の姿について予測ははずれたといえる。農民はただ、あのやみくもで狭量な所有欲だけで動くものではなく、ブナシスやボネ神父のように彼らの欲望を利用したり、宗教心に訴えなくとも、彼ら自身の勤勉さ、一種の平衡感覚が、農村の文化向上と繁栄をもたらしているし、[44] その感情生活の豊かさ、賢明さはサンド、ドーデ、ルナールと続く清澄な文学、ミレーなどの内面から流露する静穏にみちた絵画を生み出すだけの力はあったのである。

だがバルザックの描く農民像には、以上のような欠陥があるにもかかわらず、否定しがたい現実的な迫力がある。それは外面的ながら客観的観察の緻密さに由るのはもちろんであるが、一つには彼の作家以前の潜在的感情が作用しているからではないだろうか。特に幼時から少年期に分泌された苦渋があらたに筆先ににじんだ結果ではないだろうか。

バルザックの父方の祖先が高ラングドック（Le Haut-Languedoc）のタルン県（Tarn）モンチラ村（Montirat）の百姓（laboureurs）であったこと、この山間の村は豊かというよりむしろ貧寒の村であったことは、周知の事実である。[45] ただ彼の父ベルナール＝フランソワ（Bernard-François BALSSA）は早くから公証人書記をつとめ百姓仕事はほとんどしなかったと思われるし、オノレの出生時にはすでにトゥール（Tours）の師団兵站部長であったから、この作家は「農家の子」とは言えない。また、この都会人的野心のかたまりであった父が、わが子をして田園生活つまり農耕生活に関心を抱かせることなどいっさい無かったようである。しかしながら、ここに個人的な意志や感情によってはどう抑えようもない隔世遺伝（atavisme）あるいは遺伝（hérédité）という現象がある。研究家の多くは彼の頑健な肉体と明朗で野卑で物欲の強い精神の中にそれを認めようとし、またブランシャールのように彼の田園への執着、思慕の源泉をそこに想定してみる人もある。[46] カズノヴに至っては、バルザックのスペインへの偏執的好みを、彼の体内に流れる血によるものではないかと考える。[47] われわれはこうした説を肯定あるいは否定する根拠を持

つものではないが、同時にそれは無視し得ないのであり、それに加えて少年期の後天的所与もまた無視できないであろう。サント・ブーヴは、ナポレオン没落当時十五才であったバルザックについて次のように述べている。「氏は少年特有の明晰かつ鋭い観察力で帝政時代を知り、また感じたのである。この明察する力は、そののち省察する力が加わって完成されるであろう。（中略）氏と同年輩のある人が《子供の頃から、感受性によって私は事物を洞察したのだが、それは時々刻々と私の心を突き刺す鋭利な刃のようだった》と書いているが、バルザック氏もそういうことがいえたかもしれない。少年期のこのような印象は、のちになって判断や描写の中にふたたび戻ってきて、独特な感動の素地によって判断や描写の中に把握され、まさに、それらの判断や描写に鋭さと生気とを加えるのである」[48]と。バルザックが農民に対し、真に感動的な接触つまり対等にか、あるいはむしろ劣者としてか接触し得たのは、幼児期の里子時代と少年期のヴァンドーム学院（le collège de Vendôme）寄宿時代と言ったら奇妙にみえるであろうか。しかし、一般的に言ってこの一見社会生活と最も無縁と考えられそうな時期は、実は最も自然な、ほとんど未開世界における形で、対人交渉の行われる時期であり、その場合、感覚、感情が理性に先行するものである。バルザックが生まれおちてすぐ里子になったのは、トゥール郊外のサン＝シール＝シュル＝ロワールに住む一憲兵の家であったが、ここでの人間関係がいかなるものであったかは定かではない。ただ妹ロール（Laure）とともに肉親の膝元を離れて淋しい日が多かったであろうとは充分に想像できる。近在の百姓の悪童に泣かされることもあったかもしれぬ。里子から帰ると今度はトゥール市内のル・ゲー塾（Pension Le Guay）に通うが、この四年間は、冷たい母親に対する終生の怨念、憎しみの情を植えつけられると同時に、大人の容喙できぬ半閉鎖社会ともいえる子供世界の苛酷な一面思い知らされる第一の時期であったはずである。彼の小説の世界ではほとんど子供は描かれていないが、その数少ない例外のうち、子供の世界が最も大きな紙数を占めるのが『谷間の百合』、『ルイ・ランベール（Louis Lambert, 1832）であり、而も二つながら自伝的色彩の濃いものであり、さらにそれがこの通学時代から次の寄宿時代の体験に

相応している。[49] われわれはその主人公たちの物語を通してバルザック自身のそれを察知することができるだろう。

(41) 長塚節『土』(岩波文庫) 7ページ。
(42) 田山花袋『田舎教師』(角川版) 12・56・289ページ。
(43) 島崎藤村『破戒』(新潮文庫) 54・100ページ他、および国木田独歩『武蔵野』(新潮文庫) 53ページ他。
(44) *Cf.* M. Blanchard: *ibid.*, Chapitre V.
(45) *Cf. ibid.*, pp.41—46.
(46) *Cf. ibid.*, p.317.
(47) その一書を挙げれば、Marcel Cazenove: *Le Drame de Balzac* (Ed. Delma), pp.174—193.
(48) C.-A. Sainte-Beuve: *Causeries du Lundi*, (Ed. Garnier frères), II, p.444.
(49) この二作品はいづれも「私」なる人物が語り手になっているが、『谷間の百合』の「私」がフェリックスであるのに対して『ルイ・ランベール』の「私」は誰であるか不明。バルザック自身と考えてよいか。いずれにせよ。一人称小説が主人公と作者との関連を最も濃くすることはたしかである。

『谷間の百合』の主人公フェリックス・ド・ヴァンドネス (Felix de Vandenesse) はバルザックより五年早く生まれ、バルザックと同様トゥールの寄宿学校に通学生として入校、弁当の中身のつつましさから同級生に嘲弄されるようになる。それは彼の家が貧乏であったゆえではなく、むしろ厳格な貴族家庭の躾けによったものだが、当時の世相と子供の世界の法則はそのようなことを斟酌しない。そして彼は、貴族の子弟であったからこそ、また幼時から星をみつめて瞑想に耽るような感受性の強い子供であったからこそ、「これら粗野で下劣なプチ・ブルの悪童ども (pauvres polissons)」の侮辱に堪えられなかったのである。彼は喧嘩早い子になり、彼らはそれに卑怯な手で応酬する。のちに貴族を僭称するバルザックがフェリックスを通して貴族的に追体験をしたとも考えられるが、その精神の傾向はほぼ同じとみてよいであろう。そしてフェリックス＝バルザックが戦う相手に農民の息子たちが混っていた

ことも当然考えられるのである。フェリックスはこの学院から、今度はついに完全なる閉鎖社会というべきオラトリオ会経営のポン＝ル＝ヴォワ学院（collège de Pont-le-Voy）に寄宿生として入る。苦しみの八年間が始まるのである。バルザックと同様、両親は面会にも来てくれず、小遣いも与えてくれぬ。それが友人たちに軽蔑の種を与え、つねにのけものにされ続ける。[50] この寄宿生活の中の苦渋は『ルイ・ランベール』がはるかに多くを語ってくれるであろう。ルイは、ポン＝ル＝ヴォワと同じくトゥールに近い、そして同じくオラトリオ会のヴァンドーム学院（le collège de Vendôme）に三年半を過ごす。ここはバルザックその人が約六年間つまりこの物語の語り手でありルイの唯一の親友である「私」という人物とほぼ同じ期間過ごしたところである。そしてルイがフェリックス以上に学友から嘲笑され、侮辱されるのは、バルザックに似た事情があってのことである。それは教師の迫害さえ生む。つまり天才にありがちな放心状態、あるいは無軌奔放の行為のため、現実的な尺度によってしか生徒の評価ができぬ凡庸な教師が怠け者の極印を打ち、体罰、罰課をくらわす。同じく凡庸な生徒たちは教師に雷同して天才を馬鹿とみる。ルイと「私」の最大の悲劇は、彼らの半年にわたった苦心の作『意志論』という哲学的著作を底に秘めた小箱が、下卑た級友たちによって遮二無二奪われようとしたこと、騒ぎを聞いてかけつけた教師に対して彼らを庇おうともせず、逆に秘密を売り渡した事件である。彼ら級友は教師という「共通の敵」に仲間を売ったのであり、[51] そのエゴイスム、狡猾さが貴族的精神の持主ルイと「私」には醜悪の極みであったろう。不思議なことに、これらの生徒たちがどのような階層に色分けされるかバルザックは言及していない。それは『谷間の百合』のポン＝ル＝ヴォワ学院についても同様である。[52] しかし彼らの多くが近在の富農乃至農民化した田舎貴族（例えばモルソーフや『ゴリオ爺さん』のラスチニャック家（Rastignac）のような）の子弟であったろう。彼らの行状それ自体により、また彼らの話の中に、あるいは終了式の日に出会う彼らの両親によって、バルザックが農民の本性というものをつかみとったとも考えられる。それはまた教師＝神父を通してであったかもしれぬ。「ろくな給料も貰えず、したがってまず明敏とはいえぬあわれな生徒

監」など百姓出身の愚鈍な僧職者のイメージがほうふつするのである。[53] ドーデ（Alphonse Daudet, 1840—1897）が描写してみせた寄宿学校の実態をここに相当部分移入し得ないであろうか。『プチ・ショーズ（Le Petit Chose, 1868）』はまたドーデの自伝的作品として知られているが、その主人公ダニエル（Daniel Eyssette）はラングドックの小さな町で育ち、父の工場がつぶれたため給費生として寄宿学校に入る。さらにリヨン近郊の小村の寄宿学校に自習教師として就職する。この人物は生徒として、のちに教師として、百姓の息子たちや百性出身の教師に痛めつけられるのである。特に、自習教師の彼がクラスで対峙する「敵」は「十二才から十四才までの頬っぺたのふくれた、根性の悪い山国の馬鹿ども、つまりは裕福になった折半小作人たちの伜（fils de métayers enrichis）五十人ほどで、両親が四半期百二十フランの月謝でプチ・ブルに仕立てあげようと学院に送りこんだ連中」であった。[54]「粗野で、無礼で、傲慢で、荒っぽい方言をしゃべる」彼らに、天性の詩人をもって任じるダニエルは愚弄され、いじめられ、屈辱のあまり惑乱するまでになる。この、まだ少年ともいえる主人公の痛々しさは、フェリックス、ルイの悌に似ている。彼は、ついに生徒の父親で地元の田舎貴族と町中の人間たちの奏でる楚歌の中で学園を追われ、この田舎者どもの群につきぬ恨みと憎悪を抱きつつ、地獄を抜け出る思いでパリに向かうのである。ルイもまたパリを目指す。ただルイ・ランベールとダニエル・エーセットの間には四十年の時代差があり、農民の経済的、社会的地位や勢力の変動があることを考慮に入れなくてはならない。それにバルザックは自分の出身校たるヴァンドーム学院の歴史と貴族的伝統をやや誇らしげに語ってもいるのである。しかしまた、前述のようにバルザックの少年期には零落した貴族の農民化という現象があった。またフロベールが『ボヴァリー夫人』の冒頭においたシャルル・ボヴァリー入学の場はルーアン（Rouen）の公立学院であるが、このシャルルも、元将校でいま自作農の息子なのである。[55] バルザックをはじめこれらのレアリスト作家たちが大なり小なり寄宿学校時代をとり上げていることは注意に価しよう。しかもまた多少なりと農民の子供たちと親たちの姿がみえることも。特に子供たちは家庭とその狭い周囲の環境に同化される。両

親をはじめ兄姉の、また隣近所の大人たちの言動は、その発する心の深部を覗くことなしに、ただ表面的にのみ受けとられる。それゆえに大人の農民以上に農民らしい子供らが寄宿学校に多くいたことであろう。彼らが「農民」としてこれらの作家たち、特にバルザックの人間分類法に影響を与えたであろうと思われる。

また、広い田園の中で狭く自己を閉ざした寄宿学校それ自体が村や町を思わせる。それはともに、甘美で、広大で、清澄で、みごとな調和の美を見せる田園に対して、乱雑で、醜穢で、卑小な住居に、狡智で、野卑で、泥臭くて、嫉み深い住人の集団である。高度な知的環境であるはずの学院は、頑固なスパルタ式教育理念のために、かえって野蛮の見本のような相を呈するのである。そのただ中に放りこまれた自然児ルイ・ランベールの反撥と衰耗は容易に実感できる。「…壁にかこまれて生活するのはずいぶん辛いことであった。彼の感覚は完全に成熟していて、鋭敏かつ繊細であった。そのため彼のすべてが学院の共同生活に苦しめられた。空気を腐らせるいろいろな発散物が（中略）いつも汚ならしい教室の匂いと混り合って、彼の嗅覚を悩ました。（中略）そこの空気は始終汚染されていた。そうした一種の学院製腐植土が、運動場からわれわれがつけてくる泥とたえず混り合い、堪えられぬ臭気の堆肥を形づくるのであった。それまで田園の澄みきった、香ぐわしい空気の中で生きてきたのに、その空気を奪われて…（中略）…彼はいっも頭を左手で支え、見台に肘をついて、校庭の木々の茂みや空の雲を眺めて勉強時間をすごした。[56]」バルザックが幼年時代から晩年まで見てきた農民の多くが、この教室よりもっとひどい住居を持っていたこと、「家畜も人間も折り重なって寝る」家も少なくなかったことは、すでに諸研究家の確認したとおりである。[57] そして、こうした百姓家の団塊である村落全体がまた息づまるような、閉鎖された小世界なのである。『田舎医者』に描かれたクレチン病集団発生の部落はその極端な例といえよう。どのような成行きからかわからないが「特に風通しのわるい谷底にあって（中略）日光は山の頂きに射すだけで太陽の恵みにもあずかれぬ」土地に、わざわざ三十戸の農家がひしめき、それも「たとい野獣の洞穴にも似た農奴の小屋があるロシヤでさえ」これよりましなあばら家の群であった。

そうした家と部落に住む農民たちを健康な土地に新築したきれいな家に移らせようとすると、彼らは歯をむき出して怒る。投石はおろか発砲事件まで起こり、それを推進する医者はあやうく生命を奪われるところまでゆくのである。[58] フェリックスもルイもこのような場所には住めない。彼らは二人とも少女の如く膚白く、きゃしゃな体の、繊細で感受性の鋭い少年たちである。彼らは学院の外の美しい自然にこそ保護され、いつくしまれるようにできている。だからまた農民の中には住めないであろう。彼らは優雅な地主貴族の館か、都市貴族の別荘に住むしかないのである。つまり彼らは真の意味での都会人である。だから彼らは農民の深い知恵も感情も知ることができなかった。土や石で固め、窓さえろくに無い農民のあばら家や村落が、自然の暴威から身を守るための最小限度の備えであることも気付かぬ。作家バルザックはそれは知っていた。しかし少年の時の感情はついに脱却できなかったといえないだろうか。

(50) 以上の記述は*Le Lys*…, C. H., VIII, pp.773—775.

(51) *Louis Lambert*, C. H., X, pp.387—388.

(52) 『田舎医者』のブナシスもやはりラングドックの田舎の寄宿学校で少年期の十年間を過ごすが、その家柄は不明である。ただ「田舎の寄宿学校の孤独に首までつかり」云々の言からすると、都会の子であったかもしれぬ。注目すべきことは、自由な幼時の記憶が「学院時代の退屈な生活の重みで、すっかり消え失せてしまった」と述懐していることである。『あら皮』(La Peau de Chagrin) のラファエル (Raphaël) の都会の学校の例を除き、『人間喜劇』の主役たちは、理由こそ異なれ、暗い寄宿生活を送っている。

(53) 『トゥールの司祭』(Le Curé de Tours) のビロトー司祭は折半小作人の長男であった。スタンダールの『赤と黒』において、ブザンソン神学校の生徒のほとんどが、口を糊せんがために神学生の道をえらんだ、粗野で愚鈍で嫉妬深い百姓の息子たちであり、ジュリアンを孤独に追いやることになる。

(54) A. Daudet: *Le Petit Chose* (Ed.), p.72.

(55) G. Flaubert: *Madame Bovary*, Mœurs de Province (Ed. Garnier), pp.6—8.

(56) *Louis Lambert*, C. H., X, p.371.

(57) M. Blanchard: *ibid.*, pp.288—290. なお、この「家蓄も云々」の表現は『田舎医者』にある。
(58) *Le Médecin de Campagne*, C.H., Ⅷ, pp.336—337.

フェリックスもバルザックも、あれほど深く愛した故郷トゥレースの田園に、ついに戻れなかった。バルザックがたとい戻ったとしても、サンド、あるいはドーデのように、農民と深くつながり、その心根を愛情濃やかに描き上げるようになったろうとは思われない。彼にとって「書く」ことは、情熱の動的、劇的な展開を見きわめ、その所産たる文明社会を表現することであったから、十年一日の如き農民の生活は個的には対象とするに足りないのである。彼にとって、田園とは「小さな土地と小さな館と小さな庭、それに見事な図書室」[59]、そして創作に疲れた身と心を慰めてくれる甘美な自然、きれいに耕作された田畑ということである。その夢さえハンスカ夫人への情熱の前では消散する。彼女との愛はウクライナの豪邸と大農場、でなければ瀟洒なパリの暮らしの中でなければ成り立たないからだ。

一八四二年、バルザックは、『田園生活場景』は『人間喜劇』という社会ドラマの「長い一日の夕暮れ」であり、「最も純粋なる性格の人々、秩序、政治、道徳の偉大なる原則の適用が見られる」[60]はずの『場景』であった。しかし、その『場景』の三つの作品を読みおわったとき、それら純粋な人々は農民ではなく、彼らを導く牧者たちのことであることがわかる。だが、それにしてもその先覚者たちによって救われ、幸福を得た農民たちの像の、なんと上っ調子の芝居がかった、そのくせ単調きわまる描写だろう。『田舎医者』の老人臨終の場などその良い例である。[61]

最後にくり返して言うならば、われわれはバルザックの描く農民像が、生きた農民の姿と深く結合しているところがあることを知っている。テーヌの評の如く「醜悪なもの (la laideur) をいっそう醜悪にみせる」[62]としても、それは絶対に虚像ではないのである。それがロマンチシスムに浸透された当時の趣味への順応の必要と、彼自身がこうむった影響によることも確かであるし、時にどきつい照明の結果を生んでいる。しかし彼のようなレアルな農民観を抱く

作家にとって、こうした表現法は、とりわけ農民像を形成するにおいて有効であったと言えるであろう。闇の中にうごめいていた農民が光をあてられ、舞台の上に鮮やかに姿を現わした、という譬喩を用いてもおかしくはない。バリエールの言の如く「彼以前に地方風俗に思いを馳せたものはほとんど無く」[63]またテーマの言の如く「フランス文学史上、はじめてそれを真面目に描写し」ブリュンチエールの評する如く「フランスの地方といえども地方色 (la localité) という点で異国に劣らぬ題材たり得ることを彼以前に示してくれた作家はなかった。」[64]これらの発言が他のいかなる住民よりも農民に関して適切であることは確かであろう。しかもバルザックは、都会の作家にとって最も難儀な題材である農民と真向から取り組んだ上で、いきなりその造型法の一つの極限に達してしまった感がある。

(59) *Lettres à Mme Hanska*, I, pp. 337—339.

(60) *Avant-propos*, *ibid.*, pp.14—15.

(61) *Le Médecin de Campagne*, *ibid.*, pp. 382—384. 結局、農民の中で、その内面性をよく描き出されているのは、この作中に登場する La Fosseuse であろう。その心のナイーヴな屈曲は実感的である。しかし、この娘は純粋な意味の農民ではないのである。貴族婦人に仕えた才月が長い。

(62) H.Taine: *ibid.*, p.49.

(63) M. Barrière: L' Œuvre de Honoré de Balzac, p.90.

(64) F. Brunetière: *ibid.*, p.97.